今昔物語集巻一の標題について

宮田　尚

『今昔物語集』の標題は、享受者の理会を方向づける、いわばはたらきかけの機能に重心がおかれていることを特色とする。享受者の理会を方向づけようとする以上、はなしの評価ぬきに標題は策定できないけれど、同じような立場で標題を設定している『霊異記』が評価を前面におし出しているのに対して、『今昔物語集』は極力それを避け、ことがらを述べることに終始しようとしている。

形式からいうと『今昔物語集』の標題は、〈だれ〉が〈どうした〉というかたちを基本とする。集規模でこの形式を採用した作品は、後にも先にもない。

検索の利便との目的を超えたこうした標題のありかたは、『今昔物語集』の標題を説話文学史上に屹立させている。

とはいえ、未完成説のほとんど動かしがたい『今昔物語集』のことである。標題の策定にも、とうぜんながらゆれがみられる。とりわけ、巻一には、試行錯誤の痕跡がおおく残されている。

一

右にいう試行錯誤の痕跡とは、目録標題と本文標題との差異をさす。

『今昔物語集』には、各巻のはじめに、その巻に収められているはなしの標題が一括してかかげられている。また、これとは別に、各話にはそれぞれ直接に標題が冠せられている。前者を目録標題と呼び、後者を本文標題と呼ぶ。

目録標題と本文標題とは、本来同じものであるはずである。ところが、天竺・震旦・本朝の各領域にわたって、差異のある例が求められる。数はかならずしもおおくはないけれど、別稿でふれたように、(注1)これは編集の過程で生じた現象であり、成立事情、あるいは編集のありようを知る手がかりとして留意される。

さて、所収三八話中に、目録標題と本文標題とに違いがみられるもの一五話をかぞえる巻一は、その集中度において他を圧している。一方を初案、他方を再案とするならば、ふたつの標題の併立は、初案の消し残しということになろう。再案が決定稿でないゆえ

に、後日を期して意図的に初案を残したのであればなおのこと、不用意な消し残しであったとしても、これは『今昔物語集』未完成説の後押しをするはずである。

目録標題と本文標題との特異な錯綜状況を示す巻に、ほかに巻十がある。結論的にいえば巻十の錯綜は、編集の過程で収載する予定であったはなしの中に不適当なもののまぎれこんでいることが発見され、それを排除するとともに、急きょ別のはなしを補ったことに起因する。むろんこれとて、混乱の痕を残している以上、未成熟の巻であることに変りはない。

巻一の未成熟さは、どうやら巻十のそれとは事情が違うようである。巻十が、修復の必要の出来による後天的なものだとすれば、巻一は未発酵によるところの、いわば先天的なものであるらしい。

じじつ、巻一には、第20話「仏耶須多羅許出家給語」、第24話「郁伽長者詣仏所出家語」（いずれも目録標題による）の両話のように、目録標題・本文標題ともに備わっていながら、本文の欠落しているものもある。両話はいずれも、本文標題の後に、本文の入るべき空白部分をひかえている。完成後、本文が抹消された可能性もないわけではないが、他の巻の同様の例をあわせ考えるに、標題策定後、本文の完成をみるにいたらなかったとする方が、蓋然性が強いようだ。

2

目録標題と本文標題とのあいだに差異のみとめられる巻一の十五話について、本文に照合してその適否をみるに、およそつぎの四種に分類できる。

第一は、一方が不適正なばあい。第6・22・26話がこれにあたる。いずれも、本文標題の方が適合していることを特色とする。

第二は、本文標題の方が、より妥当なばあい。第14・25・36話がこれにあたる。

第三は、目録標題の方が、より妥当なばあい。第16・19・31・32・33・34・38話がこれに相当する。

第四は、いずれの標題が適正とも決しがたいばあい。第20・30話がこれにあたる。

以下、第一のケースから順を追うて、差異の状況をひとわたりみていこう。なお、═══線部は相違のうち、特に留意すべき個所である。

〈第6話〉

目録・菩薩降伏天魔語

本文・天魔擬妨宮菩薩成道語

菩薩が天魔を降伏したのか、それとも天魔が菩薩の成道を妨げようとしたのか。目録標題と本文標題との差異は、本話の主体をだれだと認定するかの一点に絞られる。

しかし、標題にはゆれがあるけれど、本話の主旨は明白である。父王の意向を受けた天魔が、菩提樹下で正覚を得ようとしている菩薩に対して、硬軟両面から妨害を試みるがいずれも失敗し、「憍慢・嫉妬ノ心ヲ永ク止メテ本ノ天宮ニ還リニケリ」というのが本話の主旨。菩薩はただひたすら受身である。目録標題にあるような、天魔を降伏する局面はない。天魔はさまざまな妨害のすえに妨害をあきらめたのであって、それを〈降伏〉というのは、いささか無理が

あろう。

〈第22話〉

目録・鞞羅羨王一日出家生天上語

本文・鞞羅羨王子出家語

出家を一日だけしたことにより、天上界に生まれることをえたという目録標題は、内容に忠実であり、そのかぎりにおいて正しい。しかしいかんせん、天上界に生まれたのは目録標題のいう〈王〉ではなくて、その子の〈王子〉である。鞞羅羨那と称される本話の主人公に関して、彼が〈王子〉であることは四度にわたって繰返されている。〈王〉だとする目録標題の不当はあきらかである。

〈第26話〉

目録・福増比丘出家語

本文・歳至百廿始出家人語

年老いて道心を発した人物が、出家後にもさまざまな困難を経験し、その艱難に堪えてついに阿羅漢果をえたというこのはなしの、主人公の名は本文中には示されていない。別稿でふれたように、[注2]本話の背後には二系統の資料があったものとみられる。百歳の〈福増〉を主人公とする『賢愚経』『経律異相』系と、百二十歳の〈沙門〉を主人公とする『私聚百因縁集』『百因縁集』系とである。目録標題は前者をふまえており、本文標題は後者にのっとっている。そして本文もまた、後者にそっている。目録標題と本文標題との差異は、まず『賢愚経』系の資料によって目録標題を策定し、編集がすすむなかであらたに入手した『百因縁集』系の資料にもとづいて、本文および本文標題を策定したことによるもののようである。

以上、第一のケース三例のうち、第22話の目録標題の〈王〉については、〈王子〉から〈子〉が脱落したものであったかもしれない。もしそうだとすれば、単純な錯誤であり、ことさらもんだいにするまでもないということになる。

しかし、第6・26話のばあいは、事情が異なる。差異の成因には、編集意図がからんでいるようである。とりわけ第6話には、その傾向が顕著にみとめられる。この点については、後でふれる。

3

第二・第三のケースは、一方を不適当だとすることはできないけれど、他方が詳細であったり、はなしに忠実であったりして、より妥当だと判断される共通点をもつ。

以下、まず第二のケース。

〈第14話〉

目録・仏教化婆羅門城人給語

本文・仏入婆羅門城教化給語

目録標題の〈人〉は、〈入〉の誤記であろう。両標題はいずれも、婆羅門を教化しようとした仏の行動に焦点を合わせているが、目録標題が婆羅門城に入ったことに重きをおくのに対して、本文標題は教化したことを重視するという違いをもっている。

さて本文は、外道の指示によって、仏を射殺すべく構えていた婆羅門たちが、仏の示顕したさまざまな奇瑞に接するにおよんで五体を地に投げ、懺悔したという。目録標題とて、仏が婆羅門城に入ったのを教化のためだとしているから、誤りではない。しかし、〈城

ノ人皆无生法忍ヲ得テケリ〉と結ばれるところよりしても、教化を前面に出した本文標題の方が、より妥当だということになろう。

〈第25話〉

目録・和羅多比丘出家語

本文・和羅多出家成仏弟子語

いずれも出家したことを標傍しており、その意味では一方を否とするわけにはいかない。しかしあえていえば、目録標題には出家にいたるいきさつや、出家の状況にふれるはなしであることを示す趣きがあるのに対して、本文標題には、出家後の状況に比重がかかったはなしであることを示す趣きがある、といった違いがある。

本話は、出家を許そうとしない両親に対して、主人公の和羅多が熱心に説得をするところからはじまる。両親はやがて、年に三度は親のもとに帰って来るように、との条件をつけて出家を認める。

ここまでは、よくある出家譚のパターンであり、目録標題を逸脱するものではない。

ところが本話の興味の中心は、ひとつには、両親との約束を違えて帰って来なかったばかりか、ようやく帰った十二年後には、譲られた全財産を河に捨てたところにあり、いまひとつには、世俗での満足を保証する王からの還俗の誘いにも、耳を貸さなかったところにある。

出家後の、ひたむきな傾斜ぶりが本話の興味の中心であってみれば、これは単なる出家譚を越えているという方がよいだろう。

二度の試練を乗り越えたとき、その都度、和羅多は虚空に昇ったと記されている。試練を経るごとに、仏弟子の階段を一歩ずつ登っているのである。その意味で、〈成仏弟子〉を明確にうち出した本文標題の方が、より妥当だというべきであろう。

〈第36話〉

目録・婆羅門逸仏一匝語

本文・舎衛城婆羅門一逸匝仏語

――線部の違いは、この際もんだいにしない。場所を示す〈舎衛城〉は、なくてもよいが、ある方がより妥当であることはいうまでもない。

目録標題の方がより妥当な第三のケースも、事情は同じである。

〈第16話〉

目録・鴦堀魔羅切仏指得道語

本文・鴦堀魔羅切仏指語

〈得道〉の表記を欠く本文標題が、不適当だというのではない。しかし、千人の指を切らんと発願した鴦堀魔羅に、衆生の願いを聞きとどけるのが仏の本願ではなかったかと迫られて指をあたえたところ、それまで天神につかえていた鴦堀魔羅がたちまち発心し、仏道に入ったというのが本話の主旨であってみれば、〈得道〉はやはり、ある方が当をえているというべきだろう。

〈第19話〉

目録・仏夷母憍曇弥許出家給語

本文・仏夷母憍曇弥出家語

憍曇弥の出家譚であるから、そのかぎりではこれも、本文標題の表現でことたりる。検索の利便を一義とする標題なら、これで十分

機能する。

しかし、本話の主旨は、憍曇弥の度重なる出家の願い出を許さなかった仏が、阿難のとりなしでついに認めるところにある。出家をめぐる憍曇弥と仏との緊張関係が本話の中心であり、仏の夷母が出家したはなしというよりは、仏が夷母の出家を最終的に認めたというところにある以上、目録標題の方が内容により忠実だとしなければならない。

〈第31話〉

目録・須達長者造祇洹精舎供養仏語

本文・須達長者造祇薗精舎語

祇園精舎の造営が、仏への供養のためであったと、その目的を目録標題は明確にしている。本話を供養譚として位置づけようとするからには、〈供養仏〉は、不可欠というわけではないけれど、あった方がより妥当であることはたしかだろう。

〈第32話〉

目録・舎衛国勝義供養加葉得福語

本文・舎衛国勝義依施得富貴語

供養と施、福と富貴の違いはひとまずおこう。もんだいは〈加葉〉の有無である。

主人公の勝義夫妻は、城内の家々を物乞いしてまわり、かろうじて露命をつなぐ生活をしていた。とうぜん供養すべき物はない。だから仏は、ほかならぬ迦葉を勝義のもとに派遣したのであった。一塵の貯えもない勝義夫妻に、あえて供養をさせ、そのことによって教化しようとの仏の目論見は、頭陀第一の迦葉を登場させることによって実現のはこびとなる。本話で〈加葉〉のもつ意味は重い。〈加葉〉を有する目録標題の方が、とうぜんより妥当といわなければならない。

〈第33話〉

目録・貧女以糸供養仏得記別語

本文・貧女仏供養糸語

供養譚にあっては、だれが、だれに、なにを供養し、どのような結果が得られたかが必要条件となる。標題にこのすべてが盛りこまれることは稀であるが、本話の目録標題はそれを満たしている。

〈第34話〉

目録・長者家牛乳供養仏語

本文・長者家牛供養仏語

目録標題には、なにを供養したのかが示されているが、本文標題ではふれられていない。その意味で、前者がより妥当。

〈第38話〉

目録・舎衛国五百群賊称仏遁難語

本文・舎衛国五百群賊語

『今昔物語集』の標題は、だれが、どうしたというかたちの、主述の関係において構成されていることを特色とする。だれのこと、という索引的標題もむろんあるが、全体としては一割強をしめるにすぎない。本文標題は、その少数派に属する。どうしたという述部のある目録標題は、『今昔物語集』が『今昔物語集』であるために必要な条件であったし、はなしの内容を忠実に体現している。目録標題の方が、より妥当なかたちであることはあきらか

である。

第四のケースは、相違がわずかであったり、照合すべき本文が欠落したりしていて、いずれが適正かの判断が不能なものである。

〈第20話〉

目録・仏耶須多羅許‖出家給語

本文・仏耶輸多羅令‖出家語

仏が、出家の希望を聞き入れて〈許〉したのか、示唆をあたえて出家せしめたのか、本文が欠落していて、いずれとも決しがたい。

〈第30話〉

目録・帝釈阿‖修羅合戦語

本文・帝釈与‖修羅合戦語

前話との関連からすると、本文標題の〈与〉は、〈阿〉の誤写である可能性もあるが、〈阿〉〈与〉ともに意味がとおり、いずれが適とも否とも断じがたい。

4

目録標題の不適正な第一のケースは、なにゆえに存在したのか。

単純な誤脱の可能性のある第22話は別として、第6・26話の二話には、必然性があった。

結論的にいえば、それは作品の構成であり、前後のはなしとの調和である。前後のはなしとの調和は、不適正な標題をも容認するほど、『今昔物語集』が『今昔物語集』であるために必要な措置なのであった。

具体的に述べよう。たとえば第6話において、目録標題のいうような、菩薩が天魔を降伏する局面は、右にふれたとおりどこにもない。なによりも、主人公は天魔なのであって、目録標題のいう菩薩ではない。

しかし、前後を見れば疑問は氷解する。主人公は天魔であってはならないのである。第1話から第7話までの目録標題を列記すると、つぎのとおり。なお、第6話のほかは、目録標題と本文標題は一致している。

釈迦如来人界宿給語第一

釈迦如来人界生給語第二

悉達太子在城受楽語第三

悉達太子出城入山語第四

悉達太子於山苦行語第五

菩薩降伏天魔語　第六

菩薩於樹下成道語　第七

一見してあきらかなように、主人公の呼称が、釈迦如来、悉達太子、菩薩と移行している。もんだいは、ここにある。

すでに指摘されているとおり、巻一から巻三は、釈迦の受胎、誕生から入滅にいたるまでのパノラマである。その冒頭に位置する巻一の第7話までは、成道以前をとりあげている。

成道以前のことだとはいえ、受胎、誕生に関するはなしである第1・2話に釈迦如来の呼称が用いてあるのは、釈迦成道物語としてとうぜんであろう。

浄飯王の子として生を受けた釈迦は、世俗の愉悦への反省から入山し、苦行をする（第3・4・5話）。この間の呼称が悉達太子。さまざまな誘惑にもめげず、ひたすらに修行し、ついに正覚を得る（第6・7話）。この間を菩薩と称する。

釈迦如来から悉達太子へ、そしてさらに菩薩へとの呼称の移行は、釈迦成道物語の展開を意識して策定されたものにほかならないのである。じじつ、一話の主人公としての釈迦をさして、悉達太子、あるいは菩薩と称する例は、これらのほかにはない。『今昔物語集』では、巻一の冒頭の八話のほかは、釈迦はもっぱら〈仏〉として語られている。成道以前の事跡にふれるばあいに、たとえば一10・17、三13等で悉達太子・太子等の呼称が文中に用いられてはいるけれど、そこでも主たる呼称は〈仏〉である。それらの標題にかかげられているのも、もちろん〈仏〉。

苦行のすえに成道を得ようとしている第6話の主人公は、釈迦成道物語を構成しようとするかぎり、菩薩でなくてはならない。悉達太子であってはならないし、まして天魔であってよいはずがないのである。

はなしに忠実な標題をつけようとすれば、本文標題のそれになる。しかし、天魔を前面に出したのでは、釈迦成道物語としての流れがとどこおる。

二者択一の必要が生じたとき、編者は本文との乖離という犠牲をはらってまでも、釈迦成道物語をとったのだ。

目録標題がいかに釈迦成道物語にこだわったものであるかは、〈降伏〉の語にも示されていよう。局面としては欠けているけれど、成道物語を志向する以上、〈降伏〉は不可欠の事項であった。

第6話と状況は違うが、第26話のばあいも、目録標題が前後のはなしとの調和、つまり構成に目配りしたものであることはあきらかである。目録標題と本文標題とを、それぞれ第25話と併記するとつぎのとおり。

〈目録標題〉
和羅多比丘出家語
福増比丘出家語
〈本文標題〉
和羅多出家成仏弟子語
歳至百廿始出家人語

目録標題に、前後のはなしとの調和をはかった痕がみられるのは、第一のケースにかぎったことではない。

第19・20話では、〈出家語〉〈令出家語〉とそれぞれ本文標題にあるものが、目録標題ではともに〈許出家語〉に統一されている。

第30話は、第29話と同じように、合戦をした二人の人物の名を列記するかたちをとっている。

第31・32話では、本文標題にない〈供養〉の語をあわせそなえていて、供養譚であることを鮮明にしている。

第33・34話では、第33話に〈供養〉を、また第34話に供養した品物としての〈乳〉を補うことによって、それぞれ〈糸供養〉〈乳供養〉とかたちが整えられている。

第38話では〈称仏遁難〉を補うことによって、第37話の〈称仏遁難〉と一対をなしている。

こうした事実は、くりかえすことになるけれども、目録標題の策定が巻の構成にそってなされ、前後との調整をはかりながら決定されたことを意味しているにほかなるまい。

目録標題と本文標題とが相違する巻一の十五話のうちで、本文標題の方が隣接するはなしの標題と形式的な調和が保たれている例は、第36話だけである。前話には、目録標題にも本文標題にも〈舎衛城〉の名がかかげられているが、第36話では、本文標題にのみそれがあって、目録標題にはない。

5

ときには本文との乖離というおおきな犠牲をはらってまでも、前後のはなしとの調和をはかり、巻の構成を鮮明にするよう機能させられている目録標題は、『今昔物語集』にかける編者の意図そのものの表明されたものだといってよいだろう。

一方の本文標題は――これとて編者の思想を体現したものであり、享受者へのはたらきかけの思想に裏打ちされたものであるには違いないけれど、目録標題と比較するとき、構成への目配りに不足があることは否めない。あえていえば、本文標題には、素案の趣きがあるということになろうか。

目録標題が成案、本文標題が素案だとすれば、両者の関係は本文標題から目録標題へ、という順序になるとみるのが一般である。むろんそれは、大筋としては正しいだろう。

ただ、みてきたように巻一に関していえば、目録標題と本文標題とのあいだに差異のあるものが少なからず含まれている。そしておおむね、目録標題の方がより妥当なものになっている。

逆にいえば本文標題には、手を入れるべきもの、またはその余地のあるものがつけられていたし、なお残されているということになる。

これはなにを意味しているのであろうか。他の巻にも、同じような状況はなかったであろうか。目録標題と本文標題とに差異のほとんどない、あるいはまったくない巻についていえば、両者の調整がすんでいることを意味してはいないだろうか。

もしそうだとすれば調整は、目録標題にそってなされたとみなければならないだろう。

素案としての本文標題から目録標題へ、そしてさらに本文標題へと帰る、これが標題策定の手順ではなかったろうか。

ふたたび巻十を例にとっていえば、第1話の本文標題は、本文標題から目録標題への手なおしに際しての、いわば一次調整の消し残しのようである。

目録・秦始皇在感楊宮政世語

本文・秦始皇時従天竺渡利房等語

本文の内容は目録標題と合致している。本文標題のさし示すはなしは、六1に収められている。

また、巻十第29・30話の目録標題

国王服乳成瞋擬殺医師語

国王前阿竭陀薬来語

は、目録標題から本文標題への二次調整に際しての、目録標題の消し残しであろうとみられている。いずれも編者の不用意に由来するものであり、『今昔物語集』の未完成のあかしといってよいだろ

う。

同じことが巻一についてもいえはしないか。一次調整で素案の手なおしはいちおうすんだけれど、手なおしされた目録標題にもとづく本文標題への二次調整は、手つかずのままに放置された。これが巻一に、目録標題と本文標題との差異のみられるものが十五話もある理由ではないか。

第20・24の両話が、標題だけあって本文の欠落していることをふくめ、巻一はなお未成熟・未発酵の巻だったとみるほかないだろう。

もしそうだとすれば、完成のあかつきには、はなしの一部がさしかえられた可能性もありうるということになろう。

6

以下は蛇足めくが、巻一の標題を眺めていて気付くことを一点書きそえる。構成についてである。

巻一は、あるいは四部からなりたっているのではないか。

第17話「仏迎羅睺羅令出家給語」から第28話「醉羅門不意出家語」にいたる十二話は、出家譚である。この出家譚の主人公は第17話の羅睺羅にはじまり、難陀、憍曇弥、耶輸陀羅、跋提、阿那律と続く。彼らは釈迦の子であり、弟であり、叔母であり、妻であり、従兄弟である。

他の巻でもたしかめられるのだが、『今昔物語集』にははなしの内容からだけでなく、こうした主人公でつないでいく方法も採用されている。

巻二の冒頭にも、父浄飯王と母摩耶夫人のはなしがかかげられていることでもあり、出家譚のブロックの冒頭に釈種に関するはなしが配してあることは、含むところがあったにちがいない。

結論的にいえば、わたしにはこの措置は、出家譚のブロックを、巻頭の釈迦成道の物語に対応させるべくとられたもののようにおもわれる。釈種の出家譚を配することによって、釈迦の成道物語に近づけ、それと二重映しになる効果が期待されているもののようにおもわれるのである。

いささか乱暴なこの推理をあえて試みるのは、ひとつには、成道の物語と出家譚の群との後に、それぞれ対立抗争のはなしが配されている、という構成の類似が気にかかるからでもある。

第9話「舎利弗与外道術競語」、第10話「提婆達多与仏諍語」にみられる葛藤と、第29話「婆斯匿王阿闍世王合戦語」、第30話「帝釈阿修羅合戦語」にみられる葛藤とは、たしかに質は違う。同列には論じにくい面をもっている。

しかし、第29・30話の、いかにも唐突で、説明のつけにくい合戦譚の存在は、第9・10話と対応させることによって意味をもってくるといえないだろうか。

成道、あるいは出家譚から葛藤へとの展開が対応するものであるならば、巻一は第17話を境に、二部に分たれることになる。

思いなしか、こうみてくると、第16話までは釈迦が前面に出ているのに対して、第17話以下には、釈迦はほとんど出ないか、出ていても一歩下がっている気味のあるはなしがおおいように感じられる。

前半部、後半部ともに、抗争の物語の後には、教化、あるいは供養・功徳の物語が続く。仏教の浸透を伝える物語である。前半部の、教化の物語がすこぶる困難をともなっているのに比して、後半部の供養物語が比較的平坦なのは、歴史の必然というものだろう。

一部は、第1話から第8話までの成道物語。二部はそれに付随する教化譚群で、第16話まで。三部は第17話から第28話までの出家譚で、一部と対応する。続く四部は三部に付随し、二部と対応関係にある。

編者は、こうした構成を思い描きながら、目録標題の表現に手を入れていたのではなかったろうか。

注1　・今昔物語集の編集過程（本誌20号、昭59・11）

注2　・『今昔物語集』巻十の構造（本誌21号、昭60・11）

本稿のテキストには、東京大学国語研究室資料叢書本（汲古書院）を用いた。